

人間国宝・中川衛さんに聞く

藩政時代、加賀藩前田家の武具や調度品をそろえた御細工所で、おもに武具製造に用いられた加賀象嵌。とりわけ鐙に施した象嵌はどんな衝撃にも剥がれ落ちないと言われ、豪華な意匠とあいまって「天下の名品」と謳われた。明治維新後、廃刀令によって大きな打撃を受け、さらに第二次世界大戦後は技術者の高齢化や後継者の減少から技の継承が危惧されたが、近年、現代生活の中で息づく新しい造形表現として再評価の機運が高まっている。折しも加賀象嵌の技を伝える金沢美大教授で彫金作家の中川衛さんが重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された。1947年生まれの中川さんは、戦後生まれとして初の人間国宝でもある。加賀藩伝統の技法と現代的な作風で金工の世界に新風を吹き込んだ中川さんにお話を伺った。

一目ぼれした「加賀象嵌の鐙」

事務局 人間国宝認定、おめでとうございます。まずは先生が加賀象嵌に出会ったきっかけをお聞かせ下さい。

中川 金沢美大を卒業後、松下電工に就職し、ドライバーやシェイバーなどの商品デザインに携わりました。しかし3年間勤めたところで都合によりUターンしまして、石川県工業試験所の研究員になったのです。ちょうどそのころ、石川県立美術館で開かれた加賀象嵌の鐙の展覧会を見たのが、この道に入るきっかけでした。

事務局 その時、どんな感想を抱かれましたか。

中川 江戸時代の作品ながら、いずれもオシャレで、シャープな美しさに一目ぼれしてしまったのですよ。もっともその時は、象嵌という字も知らず、伝統工芸展と日展の違いも分からないズブの素人でしたが。

事務局 その後、斯界の第一人者・高橋介州先生の門を叩かれた。

中川 高橋先生に^{たがね}鑿と金槌を借り、家に帰って習った通り、やってみたんです。ところが板に鑿が突き刺さった上に、鑿まで折ってしまった。これは先生に怒られる、と恐る恐る見せに行ったことを覚えています。すると先生は「初めはそんなもんや」と。いまの学生でも鑿を折るようなことはありませんから、そのころの私は学生よりも下手だったのかもしれない（笑）。



象嵌花器「北の森」



鑿彫りの制作

休まず作りつづけた「修業時代」

事務局 修業時代、ご苦労はありましたか。

中 川 高橋先生から「休むと技術が落ちる。少しずつでも休まずやれ。人まねをするな。思い切りハイカラなものを作れ」と教えられました。試験所から帰り、1時間ほど仮眠して翌朝4時過ぎまで制作を続け、朝刊を読んでから一眠りしてまた仕事、という生活が何年も続いたものです。当時、子供の顔を見たのが小学校6年間で、確か2度だけだったと記憶しています。一度は入学式、そしてもう一度は登校途中の子供が田んぼに落ち、飛び起きて助けに行った時（笑）。家族には迷惑をかけましたが、私自身は苦労だと思ったことはありません。

事務局 その原動力は何だったのでしょうか。

中 川 自分の作った作品がきれいに仕上がると、またやりたい、と新たな意欲が湧きます。逆に、もし思い通りにならなかった場合は、もう一度挑戦してやろう、という気持ちになったのです。

工夫してつくった「竹ひごの飛行機」

事務局 子供のころからデザインが好きだったのですか。

中 川 物を作ることが好きでしたね。小学生の時は竹ひごで飛行機を作るのが好きで、あれこれ工夫を重ねたものですよ。

事務局 工夫とは、たとえば？

中 川 飛行機の胴体のところを三角に削って重量を軽くするんです。ただ、軽量になると折れやすくなりますから、今度は表面をロウソクであぶって補強するとか。そうやって工夫した竹ひごの飛行機で大会にも出ていました。

事務局 そうした竹ひごの飛行機に手を加えるようなセンスが、現在の先生のオリジナリティーに結びついているのですね。先生の作品には常に、いまある現状を改革しようという姿勢がうかがえます。

中 川 自分なりに変える。あるいは自然のなかの一瞬の現象や、時間によって移ろう変化を強調したり、誇張して描くことはしばしばあります。目に見えたものをそのまま描いてもダメなんです。



毎年制作している純金製干支
(限定品)



象嵌制作途中の作品



象嵌籠銀花器「岑寂樹林」(石川県立美術館蔵)



縞文象嵌籠銀花器



象嵌する時の、兎、木菟、金魚のデザイン図

残すのは「伝統技法」 育むのは「新しい感性」

事務局 今後のビジョンをお聞かせ下さい。

中 川 世界にもほとんど残っていない加賀象嵌の技法をしっかりと守り伝え、同時にデザインや技法をさらに深め、自分なりの新しい物を作っていきたい。私が行っているのは伝承でなく、あくまで伝統的技法です。伝統とは新しいものを加えることによって、後世に残っていくものだと思います。

そしてもう一つは、後継者の育成です。高橋先生に習ったことを、高橋先生に「ありがとう」とお返しするのではなく、次の後継者に渡していくことが、ご恩に報いることだと考えています。

事務局 本日はありがとうございました。